

船井情報科学振興財団交流会 ディスカッション 議事要旨

文責：畠山大輝

1. 日時：2013年8月3日(土) 16:00～17:00
2. 場所：New York Marriott Marquis Duffy/Columbia room
3. 出席者：Funai Overseas Scholarship 奨学生他
4. 議題
 - I. 留学・アプライして初めて見えてきたこと
 - II. 日本の大学教育・企業経済のあり方への要望
5. 議事概要

5人1組の班に分かれ、それぞれの班で20分間ずつ各議題について話し合った。その後、各班の代表者は班の意見をまとめ、発表した。尚、ふたつ目の議題の前に班替えを行った。

I. 留学・アプライして初めて見えてきたこと

1班

・アメリカの大学院に在籍することで、大学間でシステムが大きく異なることが分かった。例えば **Qualifying Exam** の時期・方法が大学によって異なり、**Qualifying Exam** が存在しない場合もある。一方、日本の大学では大学間に大きな差がないため、アメリカのシステムが日本と同じだと思ってしまう場合も考えられる。そのため、日本の学生が海外の大学院に出願する際、日本の大学の先生が良く状況を把握せず、問題になることもある。この問題については、より多くの学生が海外に出願し、認知されることで解決されるのではないだろうか。また、より多くの教員が海外で **PhD** を取得するようになれば、状況を把握して的確な支援を望めるのではないかと思われる。

・日本の大学間での交流は、アメリカに比べ少ないのではないか。アメリカでは他の大学や企業と交流することができ、人材の交流が盛んに行われているように感じる。

2 班

・海外で生活することで日本と違う点を明確に感じるようになった。具体的には時間に対する姿勢、仕事中的態度、書類仕事の量などが挙げられる。日本では時間に厳しかったが、アメリカでは日本ほど時間に厳しく感じない。だが、時間に対する厳しさや何事にも細かいところまで気を抜かない姿勢は、日本の良さでもある。一方で、海外で研究してみると書類仕事が日本に比べ圧倒的に少なかった。そのため、より多くの時間を研究に費やすことができた。

3 班

・アメリカやイギリスで実際に研究を行うことで、日本の研究環境を相対的に評価することができるようになった。海外に出る前は日本の経験しかなかったため、どういった点が海外よりも優れているか、また劣っているかが正確に判断できなかった。海外に出ることで日本の良さや問題点を再認識することができた。

・海外に出ることで、外国で働くことなどに対する精神的なハードルが低くなった。世界は自分たちが思っていたよりも異なっていたが、距離はそれほど遠いものではなかった。

4 班

・海外で育った人はプレゼンテーションやコミュニケーションの技術を幼少時から学んでいる。日本人が海外に出て、これらの技術を数年がかりで身につけようとしても、幼い頃から訓練を続けてきた人には及ばないのではないだろうか。

・日本人の良さにも気づくようになった。礼儀正しきやマナーの良さは日本人の利点である。また、日本人としての感性を大事にしていきたい。外国人から見て日本人が作った作品は意識せずとも日本人が作ったように見えるようだ。無意識の日本人らしさを研究・作品に活かしていきたい。

5 班

・海外の大学に出願して分かったことは、合否を分けるのは人間の総合力であるということだった。日本の大学の入試はペーパーテストと面接であるが、海外の大学院では推薦状や志望理由書、成績表、研究業績な

ど、日本よりも総合的に判断される。また、海外の大学院に出願する際には、希望の学科や教授について自分で詳しく調べなければならない。その際に自分がどういった大学に向いているのか、どの教授であれば自分の趣向にあった研究ができるのか考えることで、自分を定量的に判断できるようになった。

- ・留学して感じたのは、海外における日本人のコミュニティの小ささである。現地で活動すると様々なコミュニティの繋がりを感じる。中国、韓国、インド、シンガポールなどの国は出身者も多くコミュニティの繋がりが強い。日本人のコミュニティは小さく、他のコミュニティと比べても小さくなってしまったため、船井財団のコミュニティの存在は本当に素晴らしく、有り難い。

II. 日本の大学教育・企業経済のあり方への要望

A 班

- ・完全なる年功序列制度は辞め、実力主義をより多く採用して欲しい。海外で **PhD** などの学位を取得すると、新卒採用にならないため、不利になることがある。サイクルの速いプロジェクトではプロジェクト毎に即戦力となる人材を雇うなど、中途採用を増やし、雇用の流動化を促進した方が海外で学位を取得した者、博士号を取得した者にとって、就職活動がしやすくなるのではないか。

- ・インターンシップの方法について不満がある。会社見学のようなインターンシップもあるので、より実際のプロジェクトに関わることができるような内容を希望したい。

B 班

- ・日本の博士課程に進む場合、生活費が問題となることがある。アメリカの大学院では基本的に学生が研究室に雇われているため、研究室から授業料と生活費が支給される。

- ・授業の質が日本とアメリカで異なるように感じる。日本で授業を受けていた際は、宿題をしてもきちんと採点してもらえないことがあった。海外ではティーチングアシスタントがきちんと採点し、また宿題や授業で分からなかった点をティーチングアシスタントに質問することもできる。授業によってはティーチングアシスタントが補修を行い、学生と

議論することもある。このようにアメリカには学生が深く学ぶ事ができるような支援策が設けられている。

- ・日本企業に対しては、博士卒の人材をより積極的に活用するよう求めたい。欧米の博士卒の人材は企業に行くことが一般的であるが、日本では少数派である。日本企業が専門家を必要とするような環境を整えば、博士課程に進む人が増えるのではないだろうか。

C 班

- ・アメリカではトップスクールを卒業した人が企業に入ると、様々な実務的技能を発揮し、リーダーシップもあり、企業に貢献している。そのため、企業はトップスクールで博士号を取得した者に対する信頼を持ち、良い大学の学位を持った学生を雇う、といったサイクルができています。日本企業では採用時に大学時代の成績表を重視するようなことはあまりない。日本企業がアメリカの明確な授業評価を採用すれば就職活動の新しい指針になるのではないだろうか。

- ・アメリカの大学のようなコースワークを日本の大学でも行うことはできないのだろうか。また、アメリカの大学生は課外活動でも評価されるか、日本の学生も授業と課外活動の両方を充実させるようにしないと人間として成長できないのではないだろうか。

- ・英語教育については、授業内だけでなく様々な場面で英語を話す機会を作ることができれば理想的である。

D 班

- ・日本の大学では横の繋がりが作りにくい。日本にはコラボレーションをやるような環境がアメリカほどないように感じた。研究の内容の一部が研究室の専門から逸脱する場合、他の研究室と積極的に交流していこうとすることがアメリカのメリットではないだろうか。

- ・日本の大学の授業はひとつの単位に対する価値が軽く、ひとつの授業あたりの単位がアメリカに比べ少ない。

- ・アメリカでは身分で人を判断しないように感じる。学生であろうと、実力が備わっていれば、企業の人でも「学生だから」という固定観念を

持たずに接してくれる。若くとも能力が高く、事業に結びつきそうなアイデアを持っていれば機会を与えられるようなところが魅力的である。

- ・日本企業には企業内で新しい価値を見出すような基礎的な研究を積極的に行なって欲しい。

E 班

- ・大学で学んだことが企業で役に立っていない。日本企業は大学で専門的な技能を磨いた人を積極的に採用すべきではないだろうか。

- ・日本の大学では、成績の評価基準が曖昧であり、成績評価や単位認定が厳しくないことがよくある。そうすると、学生が不真面目になり、先生も授業の難易度を下げようになり、負のスパイラルが形成される。

- ・大学における英語教育は今後重要になっていくだろう。日本の大学でも、既に授業が英語で行われているところもある。しかし、高等学校まで授業を日本語で行なっていたにもかかわらず、大学でいきなり授業が英語に変わるのは効果的だとは思えない。義務教育や高等学校においてもいくつかの科目を英語で教えていくなどの措置が必要でないか。